The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『月刊音楽』(『월간음악』) に見る韓国の西洋音楽受容 : 1970年から1992年までの演奏会データを中心に
Author(s)	金, 銀周
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49436
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏　　名	金（キム）　銀（ウン）　周（ジュ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２４３９　号
学位授与年月日	平成20年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**『月刊音楽』（『월간음악』）に見る韓国の西洋音楽受容－1970年から1992年までの演奏会データを中心に－**
論文審査委員	（主査） 教　授　根岸　一美 （副査） 教　授　天野　文雄　　准教授　伊東　信宏

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は20世紀後半の韓国、とりわけ首都ソウルにおける西洋音楽の受容の状況を、1970年から22年間にわたって発行された音楽専門雑誌『月刊音楽』（『월간음악』）を主たる情報源として探究することを目ざしており、「本文篇」（Ａ４縦長判　ix頁［目次、日本語・韓国語・英語要旨、表・写真・グラフの一覧、凡例］＋本文119頁［はじめに、第Ⅰ～Ⅳ章、結語、参考文献］）、および「演奏会データ篇」（Ａ４横長判　ｉ頁［凡例］＋323頁）から構成されている。

「本文篇」の「第Ⅰ章：韓国戦争後から1960年代までの政治体制と音楽受容」では、『月刊音楽』に先立つ時代の状況を概観した後、これらを背景として西洋音楽の受容がどのように展開されたかを、専門の音楽教育機関、コンサートホール、演奏会と主な演奏団体、音楽協会という、４つの局面において記述し、とりわけ、当時の主要なホールであったブミン館（府民館）、シゴン館（市公館）、国立劇場、市民会館の各形成史と、それらにおける管弦楽、オペラ等の主な演奏会活動の概要を述べることにより、70年代以降の状況への準備過程を解説している。「第Ⅱ章：韓国における音楽雑誌」では、1920年代に始まる音楽雑誌の発行の状況を振り返り、それらの雑誌の発行期間がいずれも著しく短かったことを、その原因に関する言説の紹介とともに指摘している。また、それに対して『月刊音楽』は22年という、韓国におけるこの種の雑誌としては長期にわたって発行されたことから、音楽界に重要な影響を与えることになったと捉え、この雑誌についての基本情報を整理して紹介するとともに、発行者であるクム スヒョン（1919～1992）の本誌発行をめぐる言説を取り上げ、論評している。「第Ⅲ章：『月刊音楽』に見る西洋音楽受容」では、当該の時代の政治的社会的な背景を概観した上で、70年代に設立された、新たな段階での国立劇場や世宗（セジョン）文化会館等のホールと、それらにお

ける年間演奏会の総数やジャンル別の演奏会の回数の推移、主に取り上げられていた作曲家たち、外国からの演奏家たちの活動、韓国の作曲家による演奏会、現代音楽、そして音楽評論について、それぞれどのような動きがあったのかを検証している。ここでは多くの項目にわたって「演奏会データ篇」から得られた数値がグラフとともに掲げられており、例えば「主にとりあげられていた作曲家」たちについては、演奏された延べ曲数の上で、第１位がベートーヴェン、第２位がモーツァルト、第３位がバッハといった結果が示され、演奏家および聴衆の傾向を窺わせている。また「主に演奏されていた韓国の作曲家の順位とその演奏回数」では、第１位がキム ドンジン、第２位がイム ウォンシク、第３位がキム ヨンジンとキム ヒジョとなっており、作曲界の趨勢を伝えるものとなっている。他方、現代音楽や評論活動については、関連記事の一覧の表示や評論家たちの評論に関する言説の紹介が行われている。「第Ⅳ章：『月刊音楽』の時代と現代」では、この雑誌が韓国の西洋音楽文化受容にとって持っていた現代的意義を改めて強調し、続いて簡単な「結び」を述べている。

以上の「本文篇」に対する別冊として提出された「演奏会データ篇」は、『月刊音楽』に掲載された「演奏会の案内」をもとに、1970 年 7 月 1 日から 1992 年 10 月 27 日までの演奏会について、開催年月日、演奏会名、会場、ジャンル、作曲者、曲目、演奏者、指揮者の順にデータを掲げたものであり、エクセル・ファイルにして 15494 行のデータをプリントアウトしたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は韓国における西洋音楽の受容史のドキュメントとして音楽雑誌『月刊音楽』に注目し、そこに記録されている種々の情報を整理し、一時代の全体像を提示することを目指した研究である。また、この目的のために、韓国戦争後から 20 世紀後半の韓国における西洋音楽の状況がどのようなものであったかを、さまざまな文献を参照しながらまとめており、幅広い基礎研究を窺わせる論考となっている。2008 年８月４日に行われた公開口頭試問では、問題の設定から解答の提示へという基本的道筋が十分に示されていないとの指摘がなされ、さらに、西洋音楽受容を主題としながらも、当該雑誌の意義を述べることに傾きすぎており、受容された音楽の中身に関する議論が乏しいとの指摘や、研究の方法として統計に現れるような意味でのデータだけに頼りすぎており、もっと幅広く言説等の資料についても検証することが望ましい、などの指摘がなされた。これらに対する提出者の回答は誠実かつ概ね妥当なものであったが、韓国における先行研究や資料の整備が十分でないことについては、論文のなかでなお一層具体的に説明がなされていることが必要であったと言えよう。しかし、ハングル文字で記された曲名をはじめ、さまざまなデータを一つ一つ丹念に日本語に置き換え、膨大な資料を整理し提示した努力は十分に評価されうる。「演奏会データを中心に」という出発点を得ながらも、主題である「西洋音楽受容」については、掘り下げるべき問題を残しているが、そのことは、本論文が韓国における 20 世紀後半の西洋音楽受容の状況について基礎的な情報を提供し、今後の研究への出発点として十分に活用されうるという意義を損なうものではない。以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。